

令和7年度 学校園評価 学校園関係者評価書

学校園名 三木市立緑が丘中学校

1 学校園教育目標

自ら考え 正しい行動のできる 心豊かな生徒の育成

2 本年度の重点目標

- (1)めざす学校像 ① 安全で安心して過ごせる学校 ② 思いやりにあふれ、人権への配慮が行き届いた学校
③ 自主的・意欲的な活動を通して、子どもたちが自己実現できる学校
- (2)めざす生徒像 ① 何をすることが必要なのかを考え、何事に対しても積極的に行動できる生徒
② 自分を大切にするとともに、お互いを認め、高め合う生徒 ③目標を持ち、その実現に向けて何が必要かを考える生徒
- (3)めざす教師像 ① 確かな人権感覚を持ち、子どもたちに寄り添い、伸ばす教師
② 子どもたちの自己実現を助け、自立した子どもたちを育てる教師

3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
学習指導	①学力向上のためのわかる授業づくり ②補充学習や家庭学習の充実による基礎学力の定着	①本時の授業の流れ、目標を明示することで、生徒自身が何を学ぶのかを理解して学習することができた。 ①教職員相互の授業参観により、生徒への取り組ませ方、発問の仕方を改善することができた。 ①週30コマを基本とする運用で授業時数は確保することができた。 ②長期休業中やテスト前に補習を行い基礎学力の定着を目指した。 ②夏季休業中の課題を精査し、自分たちで考え課題に取り組ませた。 ②ラインズeライブラリによって各自の段階に応じた学習を行うことができた。 ②ラインズeライブラリでの学習を生かすための方法について検討を要する。	B	①タブレット端末を活用した授業法についての校内研修と、講師招聘研修を行い、タブレット端末などのICT機器を、毎回の授業で生徒も教職員も効果的に活用できるようにする。 ②家庭と協力し、長期休業中以外の時も、自ら学習に取り組む習慣を身につけさせる。 ②生徒の基礎学力の定着を図るため、ラインズeライブラリの活用方法を教科ごとに見直す。
生徒指導	①予防的生徒指導の充実 ②いじめ対策、不登校対策の充実	①生徒会専門委員会を中心に「時間を守る」、「服装を正す」など基本的な生活習慣に対する取り組みを行えた。 ①②個人ノート、生活アンケート、シャポテンなどを通して日常から生徒の小さな変化を見過ごすことがないように取り組めた。 ①②定期的に生徒指導委員会および不登校対策委員会を行い、全職員で情報共有を行った。 ②情報共有シートを活用して各生徒の状況を整理し、共有した。また各学級の時間割を掲示するなど、FU教室の環境整備を行った。 ②学校行事への参加の仕方や、登下校のペース、みっきいルームの体験など、生徒自身や保護者の意向を丁寧に確認しながら、目標設定を行った。学習に限らず、FU教室での過ごし方に見直しを持てるよう促した。	B	①3年間を見通して、計画的に薬物乱用防止教室や情報モラル講演会を実施し、予防的生徒指導を行う。 ①生徒会専門委員会と連携し、規範意識に対する取り組みを向上していく。 ①②生徒が相談しやすい環境づくりに努め、生徒の背景に目を向けた情報交換を迅速かつ丁寧に行う。 ①②SCやSSWと連携しながら、不登校生徒が教室復帰などの目標を設定できるよう、具体的な方策を考える。

4 自己評価方法の適切さについての学校園関係者評価

○生徒・保護者の80%以上、教職員の95%が回答しており、学校関係者の意見が反映されている評価書といえる。

○三者の結果を併記し、比較しやすい資料になっている。

○アンケート結果に生徒・保護者・教職員の値の差を算出し、結果のズレを示している。

○保護者アンケートに「自由記述欄」を設け、数字だけではわからない意見を参考にして評価が行われている。

5 評価の観点ごとの学校園関係者評価

学校園自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
評価Bは妥当である。 生徒と教職員の結果には差はなく、基礎学力の定着のためにわかりやすい授業が行われていると考えられる。学習習慣の指導の項目で約半数の保護者が否定的であることには注視すべきだが、ただ宿題の量を多くすればよいという単純なものではない。次年度以降、生徒が学校でも、家庭でも主体的に学習に取り組むための方法を検討していただきたい。
評価Bは妥当である。 昨今問題となっている若年層の薬物乱用やSNSトラブルを未然に防止するための講演会などを行っている点は評価できる。また、教職員は、日々細かなことから指導を行い、生徒がルールやマナーを守る態度を醸成している。しかし、生徒理解、問題行動への指導の項目の教職員との意識の差について詳細を分析し、次年度の指導に活かしてほしい。

<p>特別活動</p>	<p>①生徒の主体的な活動の推進 ②各種行事の活性化</p>	<p>①各学年、担任を中心に工夫して取り組んだ。 ①生徒会を中心に、規範意識を高める取組を行った。 ①②各委員会で学校の実態に沿った活動を企画し、実行した。 ①②生徒が一体となって各行事に取り組めるよう、生徒会通信の発行や校内放送の活用など、生徒会からの発信方法について工夫した。 ②体育祭、文化祭などの学校行事では、生徒の達成感や自己有用感を高めることができた。今年度は文化祭の中で3学年全クラスの合唱を行うことができた。</p>	<p>B</p>	<p>①生徒会を中心に、規範意識を高める活動を継続する。 ②行事に向けた企画や準備において、より生徒主体の取組となるよう工夫を重ねる。 ②生徒会企画のあり方について、これまでの取組を基に改めて検討し、各行事のねらいを達成できるよう目指す。</p>	<p>評価Bは厳しく、Aに近いBである。 学校行事は生徒が主体となり運営し、充実したものになっている。生徒が自己肯定感や達成感などを得ることにより、内面の成長につながっていると考えられる。次年度以降も生徒会担当の先生だけではなく、学校全体で支えていただき、よりよい行事になることを目指してほしい。</p>
<p>道徳教育・人権教育</p>	<p>①道徳教育の充実 ②人権意識の向上</p>	<p>①道徳の年間指導計画を見直し、狙いを明確にした授業実践を行うことができた。 ①講師を招いて校内授業研究を行い、道徳指導の指導力向上を図ることができた。 ②人権標語・作文・ポスターについて各クラス・教科などで作品作りを通じて人権について学習を深めた。 ②生徒会と連携し生徒自らが目標を設定することで人権尊重について自分事として取り組めるようにした。より充実した活動となるよう学校行事との日程調整が課題。 ②クラスの枠を超えて様々な意見を聞き、人権について幅広く考えることができた。 ②同和教育三木市指定教材を活用した授業実施のため、校内や学年での研修の機会を充実させたい。</p>	<p>B</p>	<p>①教科横断的な視点に立った道徳教育のあり方を検討し、カリキュラム・マネジメントを意識した年間指導計画を立てる。 ①行事などに関連を持たせた単元型学習で、生徒の学びが深まるよう工夫していく。 ②6、11月の問題行動が多い時期に、人権尊重月間の取組を学級・学年経営の一環として浸透させるため、学校行事とバランスを取りながら柔軟に実施したい。取り組むテーマの改善と生徒への呼びかけに工夫をしたい。 ②同和教育三木市指定教材の授業実施のため、校内や学年での研修を行う。</p>	<p>評価Bは妥当である。 道徳教育に関しては担任ではない教員が授業を行うなど、計画的に実施されており、モラルや道徳心を育む時間となっていると考えられる。また、総合的な学習の時間は人権学習、同和教育、探究活動が無理なく、バランスよく実施できるよう年間計画を立てた上で実施してほしい。</p>
<p>特別支援教育</p>	<p>①支援を要する生徒の理解と支援の充実 ②交流を通じた学びの充実</p>	<p>①職員間で意見交換を行い、支援方法や指導方法を確認しながら支援を行うことができた。 ①生活支援教員と連携し、支援が必要な生徒に有効敵に関わることができた。 ①進路決定に向け将来を見据えた進路を本人や保護者と一緒に考えることができた。 ②同学年の生徒を中心に行事や授業において多くの交流を持つことができた。 ②特別支援学校とは、学期に1回の居住地交流、1学期に地域校交流を実施した。</p>	<p>B</p>	<p>①生活支援教員との連携をさらに深めるとともに、情報交換を密にとりながら、様々なタイプの支援に柔軟に支援できる体制をつくる。 ①卒業後の進路について本人や保護者との連絡を密にする必要がある。 ②交流行事の時間設定や中学校のカリキュラムの中でどのように効果的に実施できるかが課題である。</p>	<p>評価Bは妥当である。 生徒への支援策は1つではない。経験豊富な教員と生活支援教員がリーダーシップをとり、学校全体でよりよい支援を行っていただきたい。また、中学校卒業後の進路については、多種多様となっていることを生徒・保護者に提示し、ミスマッチが起こらないような進路指導をお願いしたい。</p>
<p>家庭・地域との連携</p>	<p>①家庭・地域との連携強化 ②学校からの情報発信や学校公開による開かれた学校づくり</p>	<p>①着付け教室や茶道教室、書道教室、花苗植栽などの、学校運営協議会からの活動を行い、愛校作業などの校内整備にも力を貸していただき、地域との連携を深めることができた。 ①担任を中心に、教職員と家庭との連絡を密にとり、情報交換をして連携を強化することができた。 ②学校のホームページを頻りに更新し、学校での活動を積極的に発信することができた。 ②学校通信・学年通信は、月1回ペースで発行し、学級通信も各担任の作りやすい形とペースで継続して発行し、情報発信を行うことができた。</p>	<p>B</p>	<p>①部活動の地域移行がすすむと、取組内容が増やしにくくなる可能性があるが、学校運営協議会委員の企画や運営による、学校と地域との交流や活動の場を、さらに増やしていく。 ①担任だけでなく、学年所属のどの教職員でも、気兼ねなく家庭と連絡のとれる体制を構築する。 ②人権作文発表会、文化祭だけでなく、より開かれた学校として認められるような、オープンスクールのあり方を検討する。</p>	<p>評価Bは厳しく、評価Aが妥当である。 3年前から実施している学校運営協議会が紹介した連携活動を継続している点は評価できる。生徒の反応もよく、地域から招いている講師の方々も協力的である。次年度以降は、コミュニティスクール主体で地域の人材を発掘し、学校では学ぶことができないこと(金融・経済・投資など)を学ぶ機会を設定できればよいと考える。</p>
<p>教職員の育成</p>	<p>①研究授業・研修会の充実 ②生徒理解に努める教職員の育成</p>	<p>①一部教科だが、ICT機器等を活用した「個別最適化」の学習スタイルに取り組むなど、授業改善に積極的に取り組んだ。 ①相互授業参観を複数回実施し、教職員の相互参観の機会を増やすことで、指導力向上のきっかけを作ることができた。 ①8月(個に応じた学び)、9月(不登校対策)、2月(道徳教育)の3回、講師を招いて校内研修を行った。 ②生徒指導委員会を週1回、不登校対策委員会を月1回開催し、学年内で周知するとともに、職員会議でも情報共有を行った。 ②サポート教室や保健室対応の教職員を毎時間割り当て、対応を確実にできる体制を構築した。 ②カウンセリング週間(旬間)や三者懇談などで、生徒・保護者からの話を聞く機会を設定し、生徒の背景を把握するように努めた。</p>	<p>B</p>	<p>①普段の授業でも自由に参観し意見交換ができるようにし、授業改善をさらにすすめられるようにする。 ②職員会議や委員会のときだけでなく、普段の職員室や学年指導室で、ちょっとした時間でも生徒の情報交換をすることで、きめ細かな生徒理解につなげるようにする。</p>	<p>評価Bは妥当である。 研究授業で他の先生の授業を参観するだけでなく、学校全体で自由に授業を参観できる雰囲気をつくり、教員の授業力向上につなげて欲しい。また、職員研修や委員会が必要な時期に無駄なく実施されている。次年度も継続していただきたい。さらに、生徒理解については、生徒との定期的な面談と教室での日常会話など日々の関わりを大切に、理解につなげて欲しい。</p>